

日本で食料危機は起きるのか？

私たち日本人は食に恵まれている。街に出ればさまざまな飲食店があり、いつでも食事を楽しむことができる。しかし、世界に目を向けると、ロシアのウクライナ侵攻をきっかけに、世界的な食料危機が起きるのではないかと懸念されている。日本でも食料危機は起きるのだろうか？

キャノングローバル戦略研究所 研究主幹

山下一仁

●やました・かずひと 1955年岡山県生まれ。77年東京大学法学部卒業後、農林省入省。農林水産省ガット室長、欧州連合日本政府代表部参事官などを歴任。2010年より現職。『日本が飢える！ 世界食料危機の真実』（幻冬舎新書）など著書多数。

食料の特徴

食料は、人の生命・健康に不可欠な必需品です。しかも、ほぼ毎日消費しなければならぬ。わずかの期間でも供給が途絶すると飢餓が生じてしまいます。衣料や住居などは一度購入すると長期間消費することができますが、食料は頻繁に購入しな

ければなりません。

その食料を供給するのは、第一次的には農業です。危機になってから作付けしても、自然や生物が相手なので、生産に時間がかかるうえ、病虫害や冷害で予定した生産を実現できないかもしれない。供給が途絶す場合には、備蓄や流通在庫を含めて、今あるものしか食べられなくなります。

健康のために必要な三大栄養素のうち、炭水化物や一部のタンパク質は体内で合成できません。私たちは、炭水化物を主として、米、麦、トウモロコシなどの穀物や大豆、イモ（以下これらを「穀物等」と言う）から摂取しています。穀物等の中で大豆はタンパク質を多く含んでいます。高度経済成長で脂質やタンパク質を供給する畜産物（牛乳やバターなどの乳

製品、食肉、卵）の消費が高まる前、日本人はカロリーを主として米から摂ってきました。政府は、米や麦などには食料ではなく「食糧」という漢字を充てています。

穀物等は畜産のエサとしても重要です。日本では大豆は味噌、醤油、豆腐などに使われますが、世界では油の原料として使われ、その搾りかすがエサに使われています。穀物等は、食べるだけでなく、畜産を通じて間接的に、我々にカロリーを供給してくれます。

この穀物等の国際価格が上がると、パン、ラーメン、豆腐、食料油、肉、卵や乳製品など広範な食品に影響が及びます。さらに、トウモロコシ（他にサトウキビ等）は、ガソリンの代替品であるエタノール生産にも使用されています。このため、最近では原油価格の変動がトウモロコシや代

替品である他の穀物の価格に影響するようになっていきます。

世界食料危機についての虚実

世界人口は、二〇五〇年には九七億人に増加する見込みです。さらに、経済発展により畜産物の消費が増えると穀物需要も大きく増加します。このため、世界の食料生産を六〇％程度増やさなければならぬと主張されています。

しかし、心配することはありません。世界の人口は一九〇〇年の一七億人から、一九八〇年に四五億人、二〇二二年には八〇億人に増加しましたが、これを上回って食料生産が増加しました。人口が増えていって食料危機が起きるのであれば、すでに穀物価格は上昇しているはずですが、物価変動を除いた穀物の実質価

格は、過去二世紀半ずっと低下傾向にあります。人口増加より穀物生産の増加が大幅に上回ったからです。一九六一年比では、二〇二〇年の人口は二・五倍になり、米三・五倍、小麦三・四倍となっています。緯度によって効果が異なる温暖化などの不確定要素はありますが、従来からの作物改良に加え、ゲノム編集や培養肉などの画期的な技術による増産が期待されています。

ただし、一九七三年や二〇〇八年、二〇二二年のように、突発的な理由で需給のバランスが崩れ、価格が急騰する時があります。現在はロシアのウクライナ侵攻の影響によるウクライナ産小麦の輸出減少、熱波や干ばつによる生産減少、原油・ガソリンの価格上昇等で、穀物等の価格が上昇しています。それでも実質価格で見ると、その水準は一九六〇年代